



法田波佳

---

---

重い跳ね上げ窓を開けた途端、一陣の風が吹き抜けた。昨日までとは打って変わって爽やかな風に、ようやくの秋の到来を感じる。眼下に広がる庭では、百日紅が今なお盛りとばかりに紅花を風に揺らしていた。

花は首を伸ばし、大きく息を吸い込む。清らかな空気が肺一杯に広がっていくのを感じていると、裏庭へ人影が出てきたのが見えた。縦にも横にも大柄なその人は、手には箒を持ち、荒々しい足取りで植込の方へと向かっている。束髪の中、流星群のように走る白髪は日差しを受けて輝き、彼女の快活な笑みを思い起こさせた。

「カ……！」

思わず名前を呼びかけた時、背後で扉の開く音がした。慌てて口を噤み、花は背筋を伸ばして振り返る。丁度室内へと入ってきた女性は、その視線に気づくと僅かに小首を傾げた。かたん、と扉の閉まる音が微かに響く。

「申し訳ございません。どうかありませんでしたか？」

桜印様、と続けると、彼女は長い睫毛に縁取られた瞳を

ぱちり、ぱちりと瞬かせた。新雪のように滑らかな白肌の中、外の紅花より鮮やかな唇が小さく開く。けれどそれは、途中で何かを思い出したかのようになり、静かに元へと戻っていった。耐え忍ぶように引き結ばれた唇に、花は自分の至らなさに気づく。

「あの、この時間はいつも自室にいらつしやると伺っていたので。何か御用があつて若旦那様の書齋にいらしたのかと思ひまして……」

何もないのです。そう慌てて言い募り頭を下げる。急いだあまり思い切り舌先を噛んでしまい、花はその痛みと羞恥で一層顔を深く埋めた。前掛けの上に置いた手に知らず力が籠もる。

空気の揺れる気配がしたかと思うと、鼻先を柔らかな香りが漂った。たくさんの花束を蜜で煮詰めたような、豊かで、けれど清純さも併せ持つそれに手繰り寄せられるように、花はゆっくりと顔を上げる。すぐ目の前には、桜を冠する主が微笑と共に立っていた。

着物越しでもわかる細い腕が、ゆるりと持ち上がる。袖口が垂れ、露わになった手首は抜けるように白く、まるで深海を遊ぶ珊瑚のようだった。

象牙色に赤橙や柿色、金茶で紅葉が描かれた帯へと、その手が差し込まれる。次に現れた時、か細い指は小さな帳面と万年筆を掴んでいた。

精緻な銀細工が施された万年筆の蓋を取る、微かな音が響く。差し込む陽光で鈍く光るペン先が、掌大の帳面へと何かを書きつけていく。再び蓋の閉まる音がし、彼女が帳面を花の方へ掲げた時、そこには流麗な筆致で「何でもありません」と綴られていた。

行儀見習いを兼ね女中奉公に出るように、と花が父から命じられたのは、明治四十年の夏の盛りのことだった。田舎とはいえ、数多の畑を持つ豪農である花の生家は、その親類にも比較的裕福な家が多く、伝手を辿り、東京の麹町に邸宅を有する白山男爵家へと仕えることになった。

「そういや、錫子様っていうのは一体どんな人なんだい？」

隣で床に就く準備をしていたカヨが、思い出したかのよう尋ねる。いつも澁刺と喋る彼女には珍しく、その声は傍に寄らなければ聞こえないほど小さい。なぜだろう、と不思議に思っていると、カヨは視線で花に部屋の奥を見る

よう促す。隅に置かれた文机で日誌をつける女中頭の背中を見て、花は「ああ」と心の中で頷いた。湯上がりの髪を梳いていた手を止め、カヨの近くへにじり寄る。

「お優しい方ですよ。物静かで穏やかで、怒ってらっしゃるところなんて見たことはありません」

「口が利けないっていうのは本当なのかい？」

そう言ったカヨの瞳は好奇心で輝いていた。どこまで話すべきか迷い、花は無言で頷く。カヨはやっぱりそうなのかと言わんばかりに、胸の前で軽く手を打ち合わせた。

「そうなんだねえ。いや、昼間、他の下女中たちから色々聞いてさあ」

含みを持った言い方に、花の中に戸惑いが生まれる。聞きたいと思う気持ちと、無闇に詮索するのは良くないと思う気持ちとが胸の中で闘せめぎ合い、結局口から出たのは「はあ」という何とも気の抜けた返事だった。

張り合いのない反応に、カヨは一瞬眉根を寄せる。けれど、どうしても誰かに話したかったのか、すぐにその唇はまた滑らかに動き始める。

「もともとは孝行様について英吉利イギリスに行っていたんだって。ほら、孝行様、外務省の書記官だからさ。でも、病氣

で声が出なくなつたとかで、錫子様だけ日本に戻つてくることになつたらしいんだよ」

でさ、とカヨは一旦そこで言葉を止める。そして、ここからが本題とばかりに片方の口端をにやりと上げた。

「どうにもその、口が利けないっていうのが嘘じゃないかって話なんだよ」

カヨが口にした瞬間、何かを叩きつける鈍い音が部屋中に響いた。思わず肩を飛び上がらせた二人は、音の出所へと視線を走らせる。そこには、分厚い日誌を手にした女中頭の姿があつた。

「カヨ、今は下女中の風呂の時間のはずだけど、あんたは行かなくていいのかい？」

「あ、今行きます！」

掠れた低い声に弾かれるようにカヨは立ち上がる。しかし、慌てて部屋を出ようとした彼女を、また女中頭は引き留めた。文机の前から一歩も動いていないというのに、その声はカヨの肩を掴み、その場に座り込ませてしまうほどの鋭さを放つ。

「主様のことをコンコン嗅ぎ回るんじゃないよ。あと、呼び方がなつてない。錫子様じゃなく桜印様か若奥様。孝行

様じゃなく若旦那様。ここはあんたが今まで仕えていたよな、どこにでもある家じゃないんだよ」

わかつたか、と言わんばかりに女中頭はカヨを睨めつける。その眼光の鋭さは、花だったなら縮み上がってしまうほどだったが、「はい」と威勢良く返事をしたカヨが、出て行きざま、小さく舌を出していたのを花は見逃さなかつた。

なんて根性だろう、と花が感心すらしていると、深々とした溜息が聞こえた。視線をやれば、女中頭が文机に肘をつき、額に手を当てているのが見えた。

「あの……」

大丈夫ですか、と尋ねかけた声は、もう一度響いた深い溜息に掻き消された。

「……困つたもんだね。最近、口入れ屋から入ってくる女の質が悪すぎる」

「えっ、と」

何と返せばいいのか困っていると、女中頭ははたと花へと視線をやつた。たつた今存在に気づいたというその様子に、花はほっと胸を撫で下ろす。

「あんたは桜印様のお付きだったね？」